

音声言語指導の視点から見た教科書の特徴

●前群馬大学 高橋俊二

一 声を届け、受けとめる。

『しよがくせいこのくこ 一年下』一〇六ページに「こえの 大きさ」という、音量を四段階に分けた発声法の解説がある。教材のねらいは、話す場所や相手によって、どのくらいの声の大きさがよいかを考え、話すようにしようというものである。

話す声の大きさに、学習の中心を置いている。一年生の教材として、必須で重要な教材である。一年生には、難しいことを言ってもわからない。まず音量に気をつけさせようとするのは時機を得た学習である。



1年「こえの 大きさ」

それでは、教師用指導書の何ページかに、話すときの声の大きさを考えろということだが、中心的な事項として載せられていたとしたら、どうか。それは、まことに不足。声の大きさは、話すときの初歩の初歩。教師の話は、その上を行かなければいけない。声は聞こえればよいのではない。相手に届けるのだ。

届ける声は、「話す場所や相手」によって、低い声、落ち着いた声など、質にも関係する。また、声の質は、伝えようとする物・事とも関係する。一年上六〇ページにある教材「いろいろな こえ」は、そのことを言っている。驚いたときの「あ」、何かを見つけたときの「あ」、あくびの「あ」は、皆違うのだ（もちろん、音量も違う）。

音量と声質は、温かい眼差しを向けたり、手を振り上げたりするなどの身体動作とも関係する。音声言語の教育は、このような身体言語までを含めて考える必要がある。

聞くという視点から見ても、また、話し合



たかはし しゅんぞう
前群馬大学教授。小中高大学の教職を経験。NHKテレビ「朗読入門」「話し方教室」などに出演。NPO日本朗読文化協会顧問。「なんとユーモア」(文教書院)、「声を届ける 音読・朗読・群読の授業」(三省堂)など著書多数。

う(聞き合う)という視点から見ても、音量と声質の両面から、相手の声を受けとめ、互いに受けとめ合うことの重大さと、楽しさとを、理解させ、習得させ、活用させていくことを大切にしていきたい。



1年「いろいろな こえ」

二 声を届け、受けとめる具体の姿

『小学生の国語三年』五八ページに、「声を合わせて楽しく読もう」という教材がある。はじめは、谷川俊太郎氏の「ののはな」という四行の詩。この詩の朗読・群読の授業を想定してみよう。

まずは、何度も読ませるだろう。次に読解が始まる。教師の「何が見えますか」という発問があるだろう。「なずな」「なのはな」という答え。板書する。「なもないのばな」という答えはどうするか。「名も無いのですね」とあしらって、板書しないかもしれない。

「季節は」の問いに「春」の答え。板書する。この詩の組み立て（構成）についての発問に対しての答えは、少々時間がかかるかもしれない。また、全員が気づくまではいかないかもわからない。だれかが、「問いと答えになっている」と気づいて、発言。教師は解説を加えて、「問答」と板書。

柔らかい音韻だという特徴については、どうだろう。気づかせてもらいたいところだが、全教室で学習されるかどうかは、わからない。日常から音韻について関心をもたせている教室だったら、柔らかさの要因である、ナ・ハ行が多いとか、しかもア・オ段が多いとかの

分析がなされるかもしれない。「やわらかい音」と板書。

さて、このような内容的・文体的な特徴の理解が終わると、「それでは、詩の特徴を生かして、朗読の練習に入ろう」と、実際に声を出す活動に移ってしまうことが多いのではなからうか。その前に、まだすることがある。ここまでは従来のいわゆる「読解」活動である。子どもたちは記号としての文章を分析して答えているけれど、実感していない。「なずな」「なのはな」を眼前にイメージしていないのである。このまま進んだのでは、機械的な発声の、個性の無い朗読になる。

薺なずなと菜の花の生え具合を、絵に描くように想像させよう。一緒に生えているのか。別の区画に生えているのか。何本か。広がり。傾斜は。山裾を登っていくのか。野を下っていくのか。それらの状況によって、声の広がりや違ってくる。

また、名も無い野花をも、具体的に想像させよう。薺なずなか、蒲公英たんぽぽか。図鑑をちよつと見せてもよいではないか。子どもたちの心と声は、俄然豊かになる。

問答という組み立ての音声化でも、同じ。「問いの文型は語尾を上げて」、「答えの文型は語尾を下げて」では、一律的・没個性的な音

声化になる。どんな広がりの花野を見て、どんな気持ちで、だれが尋ねているのか。それに対して、だれが、どんな気持ちで答えているのか、大いに想像させよう。それによって、声の出し方が違ってくるのだ。

「柔らかい音」についても、知識としての整理も大切ではあるけれど、具体的に、例えば「がだどどどどがど」との違いを実感させることも大切である。



3年「声を合わせて楽しく読もう」

一教材についていささか詳細に述べてきたが、ここでは次のことが言いたいのである。

前半は、いわば、正解を求める読解活動。全員の答えを一つに絞らなければならぬ収束的思考の授業である。反対に、後半は答えを一つに絞ってはいけぬ拡散的思考の活動である。

日本の子どもたちについて「PISA型読解」が不得手であるという評判は、この後半の思考が指摘されているのである。

後半の拡散的思考は、自分自身の判断・評価が求められる。菊だの桜だのと、条件に合わないでたらの想像はいけぬが、春の野花の付け加えの想像、また、野の広がりや春の陽気などの想像等々、一人一人違つてよいのである。違つたほうがおもしろいのである。

そして、皆が違う想像や読みを発表し合い、評価を話し合うところに、活発な学習が行われる。

さて、ここでは次に、群読の学習活動が控えている。一・二行目の問いと、三・四行目の答えとを、二人(二パート)で分担して読むとすれば、当然、相談・話し合いが必要になってくる。どんな聞き方をするか、どんな答え方をするか、打ち合わせが行われる。

まして、二人に、本人ではない役柄を与えたとしたら、どうなるか。例えば、幼稚園児

が聞いてお爺さんが答えるとか、鼠さんが聞いて象さんが答えるとか。子どもたちは、奇抜なアイデアを求めて、活発な議論が巻き起こるだろう。読み声もおもしろくなってくる。この段階は、「PISA型読解」が言うところの、自分の表現活動の段階である。

「ののはな」に続いて教科書には、まど・みちお氏の「かぞえたくなる」がある。貨物列車の連続と雀の並列との対比がおもしろく描かれている。この対比を、効果的に読み表すにはどうしたらよいか。この段階は、「PISA型読解」を超えた応用編の表現活動である。

「PISA型読解」というと、ややもすると説明的文章や文字言語の領域で論じられることが多い。しかし、朗読・群読のように、文学的文章で音声言語の領域においても通じるところがあるのだということを考えておきたい。

三 「PISA型」と論理的活動との関係

それでは、論理的・説明的活動の場合とは、どうなっているか。論理的な受容(聞くこと)と表出(話すこと)が、すべて「PISA型読解」とのみ対応しているわけではないが、その関係を中心にして整理してみたい。

前節と同じように、三段階に分けて考えてみよう。教材の系列は次のようになってい

- ① 事柄を正確にとらえ、整理して受容する段階。そして、的確に伝える段階。―説明・報告の系列(主として九月)
- ② 事柄を自分の視点からとらえ、判断し、意味付けして受容する段階。そして、自分の意見をまとめて伝える段階。―プラザの系列(二月)
- ③ 自分の意見を相手に応じて述べ合い、互いの意見を調整する段階。―話し合いの系列(主として一・二月)

4年「レポーターになろう」
(説明・報告系列)



4年「大きくなったら
なりたいもの」(プラザ系列)



4年「安全について考えよう」
(話し合い系列)

四 「伝統的な言語文化」と音声言語教育

この教科書では、「伝統的な言語文化」の受容は、声に出して理解し、声に出して楽しむことという主張を前面に押し出している。その視点から、教材を選定し配列している。それらは、次の三系列に整理することができる。

①『小学生の国語』「声に出して読もう」系列。ここは特に「言語文化」関係であることをうたっている。

三年…俳句 江戸・明治の有名な八句

四年…短歌 万葉から昭和の有名な七首

五年…外国の詩（文語調の詩）

カールルブツセ「山のあなた」他三編

六年…漢文「論語」有名な五章句

②『小学生の国語 学びを広げる』「読書の森」で「系列。声に出して読むことを勧めている。

（二年は民話の再話）

三年…江戸笑話・いろは歌・竹取物語

四年…浦島太郎・小倉百人一首

五年…落語・漢詩・平家物語

六年…枕草子・徒然草・おくのほそ道（冒頭部や有名な段。短く易しい部分である。）

③『小学生の国語』「言葉と体」系列。この教科書の一大特色、自分の体と声を創っていうとする系列である。

一・二年…自分の声を自覚する。

三年…群読。他者の声と合わせる。

四年…落語。語りかける声を工夫する。

五年…狂言。昔の人の心を理解しつつ読む。

六年…対話。自分たちに合った言葉を工夫。

自分の声から出発して、自分の声に戻るという一連の学習がセットされている。まさに自分の声と言葉を発見し、磨いていこうとする学習である。子どもたち一人一人の声と言葉をはぐくんでいこうではないか。

五 言語活動の習得と活用

音声言語教育の視点から見ると、学習指導要領で言語活動例の扱いが重視され、その活動例が増えていることはよるこばしい。個々の言語活動は、子どもたちに理解させただけでは不十分である。習得させ活用させて初めて身についたことになる。

一つ一つの活動例について詳述する紙面はないが、しかるべき教材の学習において、習得と活用が明示してあることは述べておきたい。

言語活動例に付随して、最近では、読解力でもない、聴解力でもない、絵や写真や地図を見て自説を述べるといふ、いわば「見解力」とも言うべき能力が求められている。この見解力についても、この教科書は応じようとしている。

4年「落語 じゅげむ」

6年「声に出して読もう—論語」

『学びを広げる』6年「枕草子」

